



# 第17回 日本体験学習研究会全国大会 大会報告

発行：第17回日本体験学習研究会全国大会運営委員会事務局  
発行日：2016年2月8日

さまざまな「体験学習」にふれ 違いから学ぶ

## 第17回日本体験学習研究会全国大会を終えて

第17回日本体験学習研究会全国大会は、2015年12月5日（土）・6日（日）、無事に盛会で終わることができました。

今大会の当日午前中は、南山大学人間関係研究センター主催の第2回公開講演会（座談会）「私の体験学習をふりかえる」の企画がありました。この企画に参加くださるとともに、本大会にご参加いただいた方もいらっしゃいました。高等教育にラボラトリー体験学習を導入した南山短期大学人間関係科の歴史の話もあり、もう一度体験学習における学びの場づくりの難しさとおもしろさが伝わる企画であったようです。

第17回大会は、みなさま一人ひとりにも参加しようという気持ちを動かすメッセージになることを願って、「さまざまな『体験学習』にふれ 違いから学ぶ」をスローガンに開催いたしました。最初は、「自—創—学—社」といった漢字に込められた意味を語るグループ、「かかわり学ぶ、私発見」、「さまざまな『体験学習』にふれる」「体験学習『守破離』様々なアプローチにふれる」、「みんな違って、みんないい」、「観る力」、「自立している：自分の足で立ってみよう」「100皮むける」などなど、小グループからたくさんのアイデアが出され、話し合いを重ねる中、統合的・融合的に本年度のスローガンが浮かび上がったのでした。

このスローガンの実現に向けて、今大会はさまざまな種類のワークショップの開催をし、体験から学ぶことのおもしろさとひろがりを感じていただけたのではないかと思います。

例年のエクササイズ・セッション、レポート・セッションも、また二日目の教育ファシリテーション専攻の院生の企画プログラムも、「さまざまな『体験学習』にふれ 違いから学ぶ」ことを大切に企画運営になったのではないかと思います。

2016年度は、南山大学の教員スタッフの都合で第18回大会はお休みをいただくこととなります。しかし、すでに関東からの参加者の方より、関東大会の実施のお話をいただいています。近々、2016年のご案内がされることと思います。さらなる発展を願って、次回の大会を迎えたいと考えています。

2016年2月吉日  
大会運営責任者 津村 俊充

## 全体の間（ポットラッチ・セッション）報告

1日目の多様な体験や気づきを参加者同士がわかちあい深めあうことを目的に、今回初めて全体の間（ポットラッチ・セッション）を実施し90名を超える方にご参加して頂きました。

初めに、全体の間（ポットラッチ・セッション）の説明をし、個人で1日目をふりかえりながら、「ちょっとした発見」と自己紹介用に「自分を動物に例えるなら…」を考えるシンキングタイムをとりました。

次に、富（知恵）のわかちあい①としてシンキングタイムで考えたことをご縁じゃんけん（2人じゃんけんをして2人の出した指の数が5になるとペアが成立する）でペアになった参加者同士がわかちあいを行いました。

次に、富のわかちあい②として4~5人1グループを作り、「今日の学びを通してもってかえり育てたいと思ったこと」をテーマにグループでのわかちあいを行いました。

最後に「全体でのわかちあい」を参加者全員で1つの輪を作り、全体の間（ポットラッチ・セッション）の時間を過ごして、伝えたいこと、感じたこと、気づいたことなどを伝えあう時間を共有し笑顔で終了しました。この会で他の参加者同士が出会いお互いの富（知恵）をわかちあう機会になり、有意義な時間になったのであれば幸いです。

ご参加していただいた皆様、ありがとうございました。

（文責：菱川慎司）

## ワークショップ報告

### 「初心者のためのワークショップ」体験学習を体験する～『体験学習』と出会う～

このワークショップは、この研究会に初めて参加される方やラボラトリー方式の体験学習を初めて体験する人を対象に行われました。ワークショップ全体のねらいは『『ラボラトリー方式の体験学習』の学びかたを、体験を通して知る』、「グループで問題解決の実習をする過程で起こるさまざまなことがらに気づく」、「自分の特徴を知る」で、2つの実習と3つの小講義を行いました。参加者は11名でした。

まず、「ラボラトリー方式」の体験学習について簡単に説明をし、実習「3つの窓」を行いました。実習では、今の気持ち、このワークショップに期待することについて、白い画用紙にクレパスで絵や言葉を描いたのち、3~4人の小グループで話し合いました。その後、ワークショップ開始から実習終了までの間にあったことや感じたことなどを話し合い、それをもとに小講義「コンテンツとプロセス」と「体験学習の循環過程」を行いました。

そして、カード型解決実習「持ち寄りホームパーティ」を2つのグループで実施しました。課題終了後のふりかえりでは、メンバーの関わり方、グループの雰囲気、自分の特徴について気づいたことなどが熱心に、かつ、楽しそうに話し合われていました。

最後に、小講義「ジョハリの窓」を行い、フィードバックの留意点について確認をしました。

ワークショップを通しての気づきとして、参加者からは「体験学習について体験から実際に学ぶことができた」、「フィードバックは相手の成長を考えてすることが大切だとわかった」、「自分とは？ということのを改めて考え直せた」等の声があり、ワークショップのねらいは十分果たせたと思われます。

参加者のみなさんの積極的な参加のおかげで、充実した時間となりました。どうもありがとうございました。

（文責：鎌田美保）

## 「学校教育におけるアドベンチャー教育を用いた体験学習」

初日の13:30から3時間、12名の参加者と共に「学校教育におけるアドベンチャー教育を用いた体験学習」というワークショップを実施しました。

参加して下さった方々は、今回の大会テーマである「さまざまな『体験学習』にふれ 違いから学ぶ」の通り、普段アドベンチャー・プログラムにあまり馴染みのない方が中心とでした。少しでもアドベンチャー・プログラムを理解していただけるような工夫をしてみようと考え、今回はプログラムの組み立て（アクティビティの選択と流れの作り方）に関しては、当日のグループ状況とグループから出てきたトピックに合わせながら展開を試みることにしました。これは、まさに自身にとってもアドベンチャーでした。

アドベンチャー・プログラム特有の流れの中で、合計で15のアクティビティと7回の振り返りを行いました。参加者の方々に少しずつグループが成長していく段階を、体験していただくことができたのではないかと感じています。また、活動後にはワークショップ自体の振り返りに加え、短い時間でしたが「学校教育における体験学習法のこれから」ということも話し合うことができ、皆様のおかげで非常に有意義な時間を過ごすことができました。

今回参加していただいた方々、また貴重な場を提供して下さった実行委員の方々に、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

※なお、今回体験したアクティビティとプログラムの流れは以下の通りとなっております。

〈プログラム内容〉

- ①指遊び（1.2.3.4.5…、バキューン）
- ②玉川アドベンチャープログラム（TAP）の紹介・Adventure とは何か？
- ③シンクロナイズドストレッチ
- ④ミラーストレッチ・ふりかえりの練習（コンテンツとプロセスの焦点化）
- ⑤happy7
- ⑥ウィンドミルストレッチ・ふりかえり
- ⑦happy11
- ⑧Beat（2人組→ふりかえり→4人組→全体）・ふりかえり
- ⑨ネームトス
- ⑩Zip Zap
- ⑪Another Name
- ⑫スピードラビット・ふりかえり…チームをどう見ているか、このチームで大切にしたいことは何か？
- ⑬Full Value と Challenge by Choice についての説明
- ⑭ヘリウムフープ・ふりかえり
- ⑮トラフィックジャム・ふりかえり

（文責：川本和孝）

## 「協同学習はラボラトリー体験学習をどう見るのか」報告

このワークショップでは、協同学習の基本的な考え方を解説すると共に、協同学習とラボラトリー方式の体験学習とでは何が同じでどこが違うのかを、特にコンテンツとプロセスに関する理解、評価に対する考え方を取り上げて検討しました。

参加者20名が4人グループ5つに分かれて行きました。最初にペアで自己紹介し、その後同じグループの

他の2人に、相手の紹介をして場づくりを行ないました。続いて石田から協同学習の簡単な歴史と考え方を話しました。その中でラボラトリー方式の体験学習との共通点である「主体的な学習」「支持的な風土」「信頼関係を築く」などについても触れました。

休憩後の後半では、ラボラトリー方式の体験学習では「プロセス」が強調されているが「コンテンツ」をどのように考えられているのか、「評価をしない」ということが大切にされているが、次にどうするかを考えるときに「評価」は必要ではないか、ということを中心に話し合いが重ねられました。

急病による担当者の変更で実施内容に変更がありましたが、協同学習とラボラトリー方式の体験学習の共通点など話し合う中で、互いに大切にしていることなども確認でき、大変興味深い時間を過ごすことができました。

(文責：杉山郁子)

## 「ラボラトリー方式の体験学習とアクションラーニング」

ラボラトリー方式の体験学習とアクションラーニングは、どちらもグループのプロセスから学びます。違いとしては、アクションラーニングは現実の問題解決に取り組むと同時に、コーチによる質問によってプロセスから学びます。ラボラトリー方式の体験学習は、実習課題に取り組んだ後に、ふりかえり用紙に記入し、それをわかちあうことでプロセスから学びます。

今回のワークショップでは、アクションラーニングのデモンストレーション（問題提示者1名、メンバー4名、コーチが中村）を行い、他の参加者の方々にはその観察をしていただきました。その後、4つのグループに分かれて1回のセッションを体験していただくとしたのですが、時間の関係で、皆さんに1セッションを体験していただくことはできませんでした。その代わりに、デモンストレーションでの観察を基に、ラボラトリー方式の体験学習とアクションラーニングの共通点や相違点について全員で対話をしました。

(文責：中村和彦)

## 「問題解決アプローチとAIアプローチを考える」

個人やグループの成長や組織の変革をめざすアプローチとして、体験や情報収集を通して目的をめざす「アクションプランニングモデル」と言われるアプローチがあります。データを収集する際に、かけている部分いけば問題点に焦点をあてるのか、強みの部分いけば真価に焦点をあてるのかによって、それぞれのアプローチを問題解決アプローチ、AIアプローチ（もしくはポジティブアプローチ）と呼ばれます。今回のワークショップでは、実習を行い、ふりかえりの際に異なる視点からの光の当て方が学習者にどのような影響を与えることになるのか、実験的に吟味する試みをしました。

参加者は、予定の24名を超えての参加がありました。あらためて、ふりかえりの項目や仕方が学びに影響を与えること、また学習者にとって適切なふりかえり実施の難しさを実感することができました。いかにライブな感覚を大事に、一つ一つのグループの体験に合わせたふりかえりが行えることがベストなのかを痛感した次第です。ご参加いただきました皆様ありがとうございました。

(文責：津村俊充)

## 「ボディワーク～ふれること・かんじること～」

からだの声をきく。からだに敏感になる。日頃、使っていない五感に目をむける。そのために、ゆったりとした時間の中で、人にふれる体験をしました。それはもちろん、ふれられる体験でもあります。「運命の青い

ひも」によってめぐりあったペアで活動しました。床に横になった相手を、心地良い音楽とあたたかな声に導かれながら、時間をかけて、手のひらで、相手のからだを、頭→左腕→左足先→右足先→右腕とふれていく。ふれている側、ふれられている側が、相手を感じ、自分のからだの声とじっくりとむきあっていく。そしてそこで感じたものを、50色クレヨンを用いてアート曼荼羅で表現しました。ふれること、ふれられることで感じる、自分のからだの声。いつまでも離れがたいボディワークでした。

(文責:北倉武昭)

## 全体会報告

大会最後の全体会は、南山大学大学院教育ファシリテーション専攻の修士1年が企画しました。今大会のローガンにある『さまざまな「体験学習」を「野菜や果物」に、「学び」を「収穫」に見立て、全体会を「収穫した野菜や果物を、みんなでわかちあう祭りの場」となるよう企画しました。

このセッションでは、まず「スライドショー」で、ワークショップやセッションの様子を全員で鑑賞し、どのような体験学習が行われたか、全体像をつかみました。その後、4人グループになり、「さまざまな体験学習にふれ」るために、1つ目のねらいとして「2日間の体験をふりかえり、他者に伝える」を行いました。ふりかえり用紙に記入後、アイスブレイクとして「多様性ゲーム」を行いました。「グループのメンバーがどれだけ違っているか」にどのグループも白熱し、うちとけ、その後のわかちあいも充実したようでした。

その次に、「違いから学ぶ」ために、2つ目のねらいとして「他者とのわかちあいから、さらに自分の学び、気づきを深める」「深めた学び、気づきを日常にどのようにいかせるか考える」を先の4人からペアになって、シェアしました。最後に全体のわかちあいで、気づきや思いを発言してもらいました。体験したワークショップやセッションに違いはあるものの、そこから得られた気づきや学びには相通じるものや、発見もあり、熱心にわかちあう姿がそこかしこで見られました。

修士1年の私たちにとっては、全体会の企画実施に至るプロセスそのものが、大きな学びでした。私たちが思い描いた全体会を実現させるために、諸先輩や先生方がお力添えをくださったことに感謝申し上げます。

(文責:横山佳奈子)

## 会計報告

### 【収支報告】2016年1月20日現在

#### 大会

#### 【収入の部】

大会参加費	416,000
広告協賛	160,000
その他	14,000
計	590,000

#### 【支出の部】

印刷費	105,894
郵送費	3,198
事務局費	32,400
大会運営費	306,649
計	448,141

大会収支総計	21,859
--------	--------

#### 懇親会

#### 【収入の部】

懇親会参加費	275,000
--------	---------

#### 【支出の部】

懇親会費	245,026
------	---------

懇親会収支総計	29,974
---------	--------

全体の収支総計	¥171,833
---------	----------

上記の収支報告には、大会報告書の郵送料が含まれていませんが、例年 3,000 円程度ですので、今回の大会の収支は約 17 万円の黒字となりそうです。例年に比べ、大会参加費が微増したこと、懇親会参加費の値上げによって懇親会参加費が増えたこと（懇親会費の支出も上昇しました）、印刷費や事務局費を抑えることができたことが黒字となった要因です。昨年度の第 16 回大会が、研究会ホームページのリニューアルなどで支出が増えて約 7 万円の赤字となりましたが、今回の第 17 回大会で前大会の赤字分を補うことができました。

なお、黒字分の一部について、日体研のホームページで現在アップできていない、過去の大会の情報を整理してページ化するための人件費（アルバイト代）や 2016 年 6 月に開催される関東大会への準備金として今後使用することも計画しています。

（文責：中村和彦）

## 第 18 回大会に向けて

南山大学で開催する、次の大会（日本体験学習研究会第 18 回全国大会）は 2017 年度 6 月～7 月の土日を予定しています。

1 年半以上の間が空いてしまいますが、寒い季節での大会開催から、初夏の大会開催に変わり、リニューアル&パワーアップして次回の大会を運営していきたいと考えています。2016 年 10 月頃には第 18 回大会の運営委員募集の日体研通信をメールでお送りします。是非、運営委員に手を挙げていただき、新しい大会をともに創っていきましょう。

また、2016 年度は、國武恵さんを中心に運営委員会が結成され、関東大会を開催して下さることになりました。日程は **2016 年 6 月 12 日（日）** です。是非ご予約ください。

関東大会の詳細は、下記の HP 又は関東大会事務局までお問い合わせください。

関東大会 HP : <http://nittaiken2016kanto.jimdo.com/>

関東大会事務局 e-mail : [nittaiken2016kanto@gmail.com](mailto:nittaiken2016kanto@gmail.com)

なお、本大会 HP からリンクが張られているので、関東大会のホームページがご覧いただけます。

第 17 回日本体験学習研究会全国大会 事務局長 中村和彦

### 【第 17 回日本体験学習研究会全国大会 運営委員会】

委員長:津村俊充 事務局長:中村和彦

委員:池田満、鎌田美保、川口純子、北倉武昭、坂中正義、鯖戸善弘、清水菜未、杉山郁子、土屋耕治、服部剛典

菱川慎司、古田典子、横井れい、横山佳奈子（五十音順）

（事務局）水野菊代

共 催:南山大学人間関係研究センター

協 力:心理人間学科 学生スタッフ、および、心理人間学科合同研究室スタッフ

### 【大会運営委員会事務局】

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18 番地 南山大学人文学部心理人間学科（中村研究室内）

TEL:052-832-3111(内線 3959) FAX:052-832-3217

E-mail: [nittaiken-jimu@nanzan-u.ac.jp](mailto:nittaiken-jimu@nanzan-u.ac.jp) URL: <http://www.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/nittaiken/>